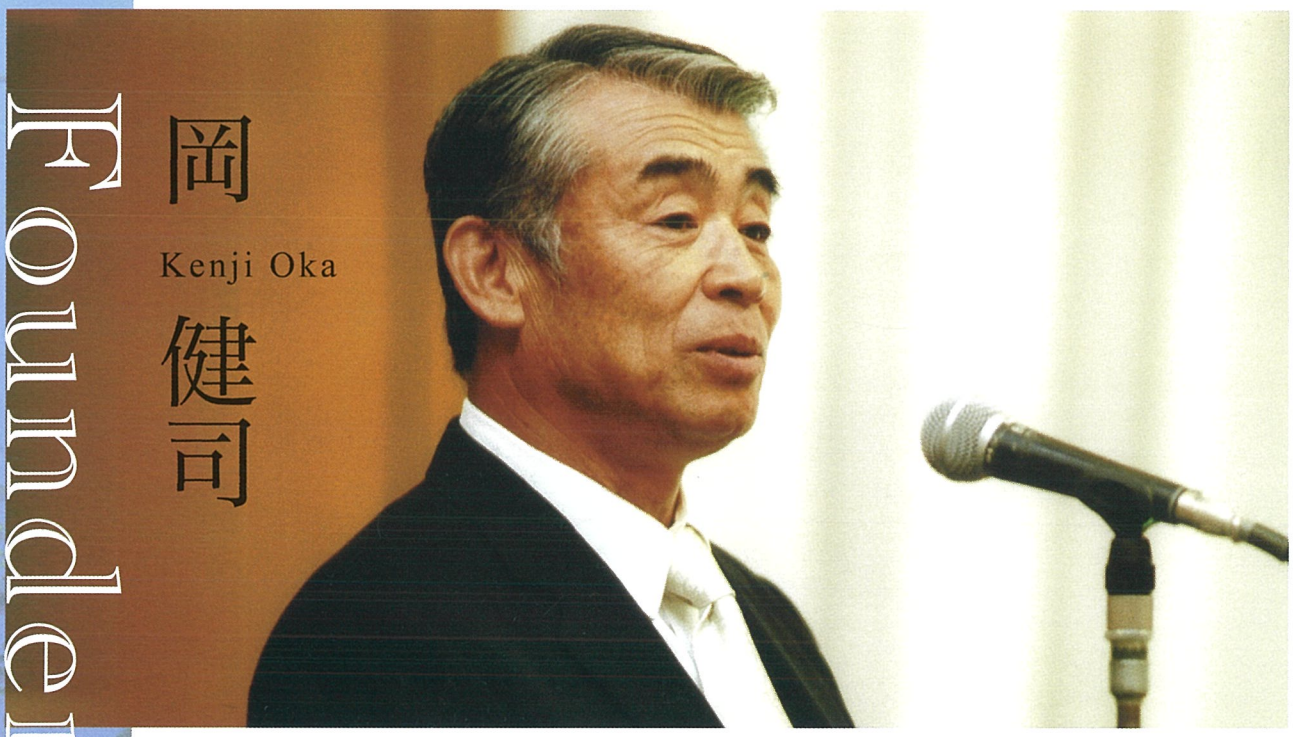
50周年を迎えた思い、限られたチャンスを生かしてこれからの未来へ。

Founder interview



岡 健司
Kenji Oka

50周年を迎えた今の思い

50周年おめでとうございます。50年前、私は27歳でした。その時はまだ株式会社ではなく有限会社です。その年に、別会社に勤めていた大屋氏を誘い、次の年に会社を作ることを決めました。心配事は何一つなく、昭和48年2月に役所へ会社設立の書類を提出しました。資本金は100万円、東横線学芸大学前に4畳半の事務所を借りました。振り返るとあっという間の50年でした。

会社設立時の思い

自然が好きだし、生き物が好きでしたからそれに関われれば満足で、ただそれだけで十分という思いでした。今思えば儲けようという感覚もなく、とりあえずどうにかなるだろうと思っていました。

創業時に最も苦労したこと

創業時に苦労したことはありません。あるとすれば金がなかったことです。資本金100万円をどうやって工面するか、銀行に100万円預けて登記しなければならないので、大屋氏とも相談し、10名ほどの株主をお願いしてどうにか揃えました。株式会社設立の本を買い、自分で登記書類を作ってみましたが土台無理な話です。結局、お金を払い登記書類を作成してもらい、渋谷の登記所に持っていきました。

創業時の思い出深いエピソード

事務所はアパートの一部屋で4畳半しかありませんでしたから、畳の上にサンプルを置いてしまうと机を置けませんでした。大屋氏は小さな卓袱台を調達し、その上に顕微鏡を置い

Memory of the 50th anniversary

て作業をしていました。で、私はふすまを外し、そこに顕微鏡を置いて作業をしました。サンプルが揺れなければそれで充分でした。顕微鏡は、大屋氏は自分で買ったのがありましたが、私は持っていなかったので安い物を買いました。

設立当初、すでに仕事をやっており、お客様に早めに入金をお願いして振り込んでいただていたので、金がなかったのに金に苦労したことはありませんでした。2人ですからどうにでもなりました。若さの強みです。事務所が狭すぎるので1年もたたないうちに2間のアパートに引っ越しました。倍の広さです。机も買いました。

初めて社員を迎えた際の思い

初めての社員は募集したのではなく、会社に来た大学の後輩でした。それから半年後、もう一人訪れてきた若者も仕事をやりたいとのことで社員になり、4人家族となりました。2間の事務所は狭くなり、一気ににぎやかになりました。来る者は拒まず、自分の道は自分で切り開けという思いでした。

最も思い出に残っている節目

1993年ころ、深海底のマンガン団塊の調査研究に参加させてもらい、業務の幅が広くなり、海外に行く機会も増えました。それと同時に外国の研究者も10人ほど採用し、社内のにぎやかさが増しました。深海の調査に係わらせてもらえるなんて普通は考えられません。水深5000mは想像する以外には行くことなどできないし、0mから5000mまでの水柱はどうなっているのか、毎日頭を巡っていて、夢でも見ているような感覚でした。

最も心躍ったエピソード

何をやってもずーっと感動していたからこれが最も感動したというのはありません。やることなすこと新らしい事柄が多かったからです。

直接仕事とは関係がないですが、30代のころ仕事でカナダに行く機会がありました。首都オタワに2泊したとき、ティーラウンジにピアノが置いてあり、20代の若い女の子がピアノを弾いていました。飲めない私がワインを頼み、少し飲んでいたせいもあってか、ふらっとピアノのそばに行き「As Time Goes By」をリクエストしたんです。気分は宙に浮いていました。

これから社員へ期待すること

月並みな表現になるけれど、新しいことへの挑戦をめざして行動してほしいし、考えていってほしい。新しいことは1から勉強しなければならないので大変だけど、貴君たちは時間が50年あるのだから、面倒くさいと思わずにせっかく大学で学んだ事柄を幅広く生かしてほしい。限られたチャンスをものにして活躍する人材となっていってください。

これから会社へ期待すること

会社は組織です。そこに所属する諸君は単なる会社の一員ではない。個人が集まれば会社になるわけではない。個人を生かす組織、その個人が大きく成長し、さらに組織の成長を促す。個人と組織の相互作用が会社を成長させるものと思う。一人一人が勝手なことをすれば会社は空中分解します。個人の個性を生かして組織を重厚にすること、景気の浮き沈みは常にあるから、それを前提にお互いに協力し合っていくことがこれからますます必要になっていくと思います。

あれから半世紀、この先も最新の知識と新たな技法に挑戦したい。

Founder Interview

大屋 二三
Futami Oya

50周年を迎えた今の思い

「あれから半世紀たったか！」それが今の思い。リタイアしてからでもすでに10年が過ぎた。時のたつのは早いもの。それだけ自分も年取ったのだが・・・

この10年の間に現在の仕事内容が昔と変わっていないのか、もし変わっていないのであれば大丈夫かと危惧し、新しい仕事が増えているのであればさらに50年を目指せると安心する。

会社設立時の思い

2013年の年報<創立40周年にあたって>でも書いたように、「何にも束縛されず、自分たちで稼いだ金で自分たちの好きなこと（研究？）ができる組織を作ってやろう」というのが設立の動機でした。将来的には自分たちの臨海実験場を持ち、大学や官立の研究所にも負けないような研究所が理想でした。

創業時に最も苦労したこと

当初は動・植物プランクトンの査定・計数がとっかかりとして思い描いていた仕事であった。しかしながら初めから思い通りにそれだけで食べていけず、返還直後の沖縄海域や山田湾での不発弾探査で食いつながざるを得なかった。

当時は現在のように小型で安価な計算機はなく、すべて手計算で換算表を作り単位当たりに変換していた。その量力は今では想像もできないだろう。

Memory of the 50th anniversary

創業時の思い出深いエピソード

薄暗い４畳半一間の設立準備室から６畳二間のアパートに移って会社を立ち上げた。営業に回るには仕事の内容を書いた【営業案内】が不可欠。いまだ実績も全くないのだからできるだけ写真などを取り入れたいと思うものの、社員は２人しかいない。作業写真には二人の社員が交代でモデルを務めたが、この【営業案内】を客先に渡す際、恥ずかしくて仕方なかった。

初めて社員を迎えた際の思い

「自分ひとりであればたとえ仕事に行き詰っても何とか生きていける」。設立時にはそんな気楽な意識でいたが、実際に社員を抱えることになって給料を支払うことの大変さを実感するとともに、仕事をとってきて教え込まなくてはならないプレッシャーに押しつぶされるのではとの思いが強かったように記憶する。

最も思い出に残っている節目

平成16年（2004年）、【ISO9001】認証を取得できた。その２～３年前、規模の大きな漁業影響調査に携わっていたが報告書に多数の間違いが発見され、会社の存続が危惧されるほどの信頼喪失を経験した。同様の間違いを二度と招かないためにはどうすればいいのか話し合い、【品質マネジメントシステム】の認証を取得して再発防止を図ることとした。

最も心躍ったエピソード

あまりないが、楽しかったエピソードを一つ。設立10年後のころだったと思う。今は亡き小川清研究部長一家の全面協力により、本社駐車場で年末に餅つき大会が催された。皆でわいわい餅をつき、出来立てのあんころ餅やらきな粉餅をいただいた。楽しい思い出である。

これから社員へ期待すること

MBRIJ の社員には、まずは専門的な知識が要求されます。それには分類学的知識や各種の生態学的知識など多岐にわたります。より広く最新の知識を求める姿勢を絶えず持ち続け、新たな技法の取得に挑戦していってほしい。会社は、ある意味「家族」である。難渋している社員がいたら助けてあげ、自分が困った場面では助けを求めよう。そんな懐の広い皆であってほしい。

これから会社へ期待すること

設立時に50年先を見据えて会社を始めたわけではないが、存立基盤の出来上がっている今ならこの先10～50年のMBRIJのあるべき姿を思い描いて活動できるのではないか。10年先までの短期計画と50年先までの長期計画を作成し、絶えず見直しながらすすめていけば必ずや良い結果が得られるはずだ。

「会社」は「社員」あっての会社であり、「社員」は「会社」あっての社員。「会社」は「社員」を大切に育て、「社員」は「会社」の発展を第一に考えることからこの先さらなる50年のMBRIJが見えてくるのではないかと思っている。皆さんの奮起に期待します。